

音声データを活用したオンデマンドでの文法学習とリアルタイム授業の組み合わせで学習効果をアップ

政治経済学部で中国語の科目を複数担当する大久保講師。今年度、オンライン授業を実施するにあたり、音声データを活用したオンデマンドでの文法学習と、Zoomを用いたリアルタイムでの学習を組み合わせで授業を行った。学生アンケートの結果から、文法学習は自分のペースで学習できる点が効果的だと学生から評価が高く、リアルタイム授業もユニークな作文演習について特に好意的な回答が得られ、手応えを感じているという。



大久保 洋子
早稲田大学 非常勤講師

音声データを活用した「ラジオ講座式」学習を取り入れハイブリッド型授業を実施

大久保講師は早稲田大学で中国語のクラスを持って4年になる。加えて他大学での授業経験、さらには講師自身の学習・研究経験をふまえ、今回のコロナ禍における全面オンライン化にあたり効率的な授業運営に成功した。2020年度は3科目を担当。学生のレベルや到達目標によって取り入れた方法は科目ごとに異なるが、特徴的な取り組みとしては、オンデマンド学習とリアルタイム授業を組み合わせた「ハイブリッド型授業」を実施した点と言える。音声データの活用、Zoomのホワイトボード機能を利用したリアルタイム作文添削など、学生からの評価が非常に高かったものがあり、オンラインならではの手応えを感じたようだ。「基本的な方針としては、リアルタイムでなければならぬ部分をZoomで、それ以外はオンデマンドでと考えました」。

インテンシブ初・中級クラスでは、オンデマンドでの予習（文法学習と練習問題）と、オンライン教室でのリアルタイム双方向演習（会話・発音練習、質疑応答、暗唱・会話テスト）を交互に実施した。オンデマンドの文法学習には、講師自身がタブレットで作成した音声データを用いた。これは教科書の文法事項や本文の解説を録音した音声ファイルで、学生は各自Waseda Moodleからファイルをダウンロードし、手元の教科書を見ながら音声を聴いて学習する。いわば「ラジオ講座方式」だ。講師はこれまでの授業経験から、文法理解にかかる時間は人それぞれのため、一度の解説で終わるのではなく、各自の必要に応じて繰り返し聞けるようにしたいと考えた。動画ではなく音声形式にした理由は、教員の負担が比較的軽いことや、全国的なオンライン授業の実施にあたり、データダイエットの必要性が叫ばれていたこと、学生の通信環境への配慮から、通信量をなるべく使わずに済む形にしたいと考えたことがある。さらに講師自身の経験として、資料の種類が多すぎると注意が分散し、理解に時間がかかると感じていたことも大きな理由の一つだ。そこで、対面授業のように教科書を見ながら解説を聴くシンプルな形にした上で、双方向授業で質疑応答の時間を十分にとり、個別の質問に答えるようにした。「対面授業の弱点として、文法を説明する時間が1回しか取れない点がありました。今回のオンライン化をきっかけに以前から興味を持っていた反転授業の方法を取り入れ、オンデマンドで音声を配信する形にしましたが、これにより学生のニーズを満たすことができ、大変良かったと思います」。

Zoomを利用した「リアルタイム作文添削」は物理的・時間的制約がなく効果的

インテンシブ中級クラスでは、Zoomのホワイトボード及びチャット機能を用いてリアルタイム作文添削を行った。これが学生からとても好評

だったという。「昨年度までの対面授業で黒板に書いてやっていたものをオンラインで実施したわけです。実際の教室では黒板の面積が限られるため全員が書けるわけではなく、また前の人が書き終えるまで待たなければならず、タイムロスが多かった。それが、チャットに書き込むようにしたことで、時間も場所も制約がなくなり、全員が作文を出せるようになりました」。授業時間内に添削しきれなかったものは、講師が授業後にMoodleでフィードバックを返した。これにより、せっかく作文したのに添削してもらえなかったという学生をなくすことができ、学生の参加意欲が高まった。この活動は、学生アンケートでも「色々な人の作文が見られるのは楽しい。オンラインのよいところだと思った」といった意見が寄せられ、非常に評判がよかったようだ。

ホワイトボードは練習問題の答え合わせにも活用し、対面授業と同様にリアルタイムで解説しながら添削を行った。学生はパソコンで中国語キーボードを設定し、中国語の発音記号であるピンインを使って文章を書き込む。「ピンインを覚えるにつれて入力速度も上がっていきました。パソコンで中国語が使えるメリットは大きく、専門学習はもちろん、卒業後の仕事にも生かれます」。中国語実践演習Iでは、実際に中国のニュースサイトで記事を検索する活動を取り入れているという。

Moodleのアンケート機能を活用して学生たちの希望に応えたい

学生の反応が見えづらいのは、オンライン授業の制約のひとつだ。大久保講師は双方向授業で個別に感想を聞くほか、Moodleのアンケート機能を活用し、課題の量や進度が学生の状況とマッチしているかを探りながら授業を進めた。学期末にも独自のアンケートを実施したところ、「講義内の作文演習やZoomのブレイクアウトルームを利用した相互確認は、中国語の能力を高めるのに非常に有効でした」「自習の日が設けられたことがうれしかった」などの声が寄せられた。今年度の経験を踏まえて、今後、授業形態が変わっても、Moodleを活用したアンケートや反転授業、モバイル端末を使った作文添削を取り入れていきたい、と大久保講師は語る。

優秀な早稲田の学生の中でも、これらの科目を選択した学生たちは「学びたい、吸収したい」という意欲が特に強いと大久保講師は語る。「学生たちの熱心な学習姿勢に励まされてオンライン授業を実施することができました。今後も学びたいという学生たちの気持ちに応えていきたいですね」。